■ ■ ■ 編　集　後　記 ■ ■ ■

本誌は支部およびセンターに所属する技術士の活動をコンパクトに集約して他の会員の皆さんにお届けすることにより、情報の共有とそこから新たな素材なりヒントを見つけていただく役割が大きなウェイトを占めていると思う。グラビアや委員会、研究会、協議会の記事、本部報告、さらには今号の総会報告などはその役割をしっかりと果たしている。■また、「エンジニアパーク」、「会員の広場」、今号の「技術士に合格して」などは、コミュニティーとしての会員相互の結びつきの強化を継続的に図り、足元を固める役割を果たしている。士会／センターとしての公的な活動を意義あるものにし続けるためには何よりも我々自身の相互理解と協力が不可欠なわけで、これも本誌の大切な役割と認識する。■そして、「特集」に代表される企画ものでは、先を意識した内容にポイントをおきながら、外との情報の交流を意図している。我々の活動を組織内の閉じたものにしないためにも、大切なスタンスだと理解する。■このような構成は長い期間をかけて諸先輩が練り上げてきたもので、明快なテンプレートを通してわかりやすい形で会員に情報の提供がされていると思う。■さて、悩みもある。〝士〟というからには技術士個人の顔を外に見えるようにしていく必要があると思う。集団としての活動だけでは足りないのではないか、そのために、本誌には何ができるか……。しかし、そこまでいくとおそらくは本誌の射程距離を越えてしまう。また、今後、インターネットと家電との親和性が増していくと、あらためて、印刷媒体とインターネットの役割分担の再構築を迫られることになると思う。それに対してどう考えるか。倉田先生の示す〝方向〟が心強い指針になるような気がした。■前号から始まった表紙の写真、これにはそんなに深い意味はない。ちょっと肩の力を抜いてもらえればそれで十分。あえていうと季節感が必要なのかなとは思う。そう考えると本誌の発行時期１月、６月、10月は実にタイミングが良いのではないか。

（第106号　編集担当　小野　孝）